

れている。インターネットのCiNii Booksで検索したところ、所蔵図書館として40カ所がリストに出てくるので、身近なところで手に取っていただきたい。

以上では、ページ数で本書の半ばを占める「18世紀」関連の二つの章について言及した。これに対して、残りの半ばを占める「序」(pp.1-27)や第1章「地誌学に関する一考察」、第4章「大学における地誌教育の内容と問題点」は、直接「18世紀」と関連しておらず、いくぶん肌合いが異なる。むしろ、そこでのキーワードは(章のタイトルからも明らかなように)「地誌学」なのである。もちろん、18世紀の地理学(あるいは18世紀に限らず、伝統的な地理学)は、ほぼ地誌学であったため、「18世紀」と「地誌学」がたがいに無関係ということはない。それでも、本書を素直に通読すれば、著者の考察の力点が「地誌学」にあり、本書を性格づける最大のキーワードは「18世紀」ではなく「地誌学」であるという感を抱かざるを得ない。その点で、本誌の編集部は書評者の人選を誤ったと言えないこともない。おそらく、本書のタイトルに幻惑されたのであろう。

こうした次第なので、この紹介文にしても的外れや筋違いという批判があるかもしれない。評者の関心のありかに対応して、つまみ食いな扱いになったことをお許しいただきたい。

(手塚 章)

戸井田克己著：『青潮文化論の地理教育学的研究』
古今書院、2016年3月刊、344p., 6,800円(税別)

評者は福岡市で生まれ育った。九十九里浜で初めて泳いだ際に、海水が何と冷たいのだろうと思った。その後、北緯40度の秋田県の男鹿半島で初めて泳ぐと、海水温は予想よりはるかに暖か

く、夏の海は穏やかであった。福岡では、毎朝、行商人が「おきゅうと」を売りに来た(1960年代の記憶)。エゴノリという海藻を加工して作ったおきゅうとは、福岡の朝食には欠かせないものであった。大学院の巡検で佐渡を訪れた際、形状は異なるが、おきゅうとの味がする「いごねり」という料理が旅館の食卓に出てきた。そして秋田大学に勤務するようになり、佐渡の「いごねり」と同様のものが、秋田にもあり、「えご」と呼ばれていた。その時、遠く離れた福岡、佐渡、秋田に、共通する文化の流れを感じた。1980年代前半のことであった。

さて、本書のテーマである青潮文化論は、市川健夫(東京学芸大学名誉教授)が提唱したものである。月刊誌『地理』古今書院1989年5月号には、特集「青潮文化—もうひとつの日本文化論」が掲載された。市川は黒潮に対して対馬海流を「青潮」と呼び、日本文化の培養に青潮の影響を指摘し、日本海をめぐる新文化論として「青潮文化論」の考え方を提唱した。本書は、長年、地理教育学、地理学、民俗学を学び、研究してきた著者が、青潮がもたらした日本の風土を多面的・多角的に理解し、その意義を地理教育の文脈から検討したものである。

著者によれば、琉球諸島付近で黒潮から枝分かれし、対馬海峡を経て日本海に入り込む青潮は、日本海沿岸を北海道まで北上するその流域の特性において、黒潮以上に日本に大きな影響を与えてきた海流であり、青潮が要因となって導き出される、温暖湿潤で南洋的な文化的特性を「青潮文化」と呼んでいる。また、青潮が狭い対馬海峡を通過することにより、朝鮮半島および中国本土からの文化的要素を伝える推進力ともなっており、青潮文化は、南洋的であり、かつ大陸的な、衣食住をはじめとするさまざまな民俗文化あるいは生活文化のことを指すとしている。

本書の目的は二つある。第1の目的は、青潮文化の特性を「フィールドサーヴェイ」を通じて検討することである。著者は広範囲にわたる地域におけるエクステンシヴな調査を、敢えて「フィールドワーク」ではなく、「フィールドサーヴェイ」と呼んでいる。第2の目的は、青潮文化を地理教育学的な見地から再検討することである。本書の構成は、以下のとおりである。

序章

第1章 地理教育をめぐる動向

第2章 青潮文化論の検討

第3章 青潮の自然環境

第4章 青潮海域と生業

第5章 青潮海域と赤米習俗

第6章 青潮海域と衣食住

終章 青潮文化論の地理教育学的考察

これからは、章ごとに内容を見ていくことにする。序章では、研究の目的、方法などが述べられている。前述した第1の目的を達成するために、自然と人間の相互作用の追及を主眼とする環境民俗学的なアプローチをとり、文献、資料収集に加えて、青潮海域各地におけるフィールドサーヴェイと、話者からの聞き書きをできるだけ多く併用しながら考察を進めるとしている。第2の目的に対しては、地理教育学的なアプローチを用いと述べている。

第1章では、後に行う青潮文化論の地理教育的検討のために、地理教育の本来の目的、近年のカリキュラムの特徴、課題について考察している。

第2章では、青潮が日本文化に及ぼしている影響や特性について考察するとともに、照葉樹林文化論やナラ林文化論について比較検討し、青潮文化論の意義を検討している。

第3章では、流域でみられる冬の降雪や夏のフェーンなどの気候環境の特性を指摘し、青潮海域でみられる特徴的な動植物（例えばツバキ、タ

ブノキ、ブナ、イカ、アワビなど）を挙げ検討している。

第4章、第5章および第6章は、本書の中核をなす部分であり、著者による全国各地におけるフィールドサーヴェイの成果に基づいて考察が行われている。具体的には、養蜂、牧畑、イカ漁、タタラ製鉄、赤米習俗、魚醬、焼酎、石焼の風習、北方の文化などの事例について検討し、青潮によって育まれた日本の生活文化を、多面的・多角的に考察している。著者のフィールドサーヴェイの主な調査地は、奥尻島（北海道）、飛鳥（山形県）、栗島（新潟県）、佐渡島（新潟県）、隠岐（島根県）、奥出雲（島根県）、壱岐（長崎県）、対馬（長崎県）、福江島（長崎県）、種子島（鹿児島県）、八重山諸島（沖縄県）などである。

終章では、4～6章で検討した青潮文化の具体的な姿を、地理教育学の見地から再度考察し、青潮文化論の教育的意味を検討するとともに、地理のもつ文理融合的で複眼的なものの見方・考え方の重要性をあらためて指摘している。

以上が本書の概要である。本書は、2013年1月に昭和女子大学大学院生活機構研究科に提出された博士論文「青潮文化－その地理学的・地理教育学的研究－」を骨子にまとめられたものである。このため、著者の長年の研究が、青潮文化論という柱をもとに集大成された文字通りの大著である。

本書の大きな特色は二つある。一つは、全国各地で著者が実施してきた精力的なフィールドサーヴェイの成果に基づいていることで説得力がある。ただし、各章で提示されている図の多くは、他の研究者の成果の引用である。著者自身が収集した調査データを地図化したり、あるいは結論的考察において、説明モデル的な図や概念図を工夫して作成するなどの試みが加えられておれば、さらに充実したものとなったのではなかろうか。

本書のもう一つの特徴は地理教育学的考察である。終章では、青潮文化論を地理教育学的に考察すると、日本文化のアジア太平洋地域との連続性および日本文化の合理性の観点から重要な意義を有するとしている。評者にとっては、青潮文化論の重要性だけでなく、青潮文化論を地理教育においていかに展開するのかについても、より具体的に示してほしかった気がする。

上述の評者の感想は、地理教育学や民俗学が専門でない人文地理学的な立場からのものにすぎない。本書は、著者が長年取り組んできた地理教育学、地理学および民俗学の立場からの総合的な成果が集大成されており、それぞれの学問分野からみても重要な学術書として評価できよう。

(山下清海)

山下清海編著：『世界と日本の移民エスニック集団とホスト社会 日本社会の多文化化に向けたエスニック・コンフリクト研究』 明石書店、2016年3月刊、336 p., 4,600円（税別）

日本においてエスニック地理学が注目されるようになったのは、1980年代も半ば以降のことといわれる。地理学の長い歴史からすれば、ごく最近生まれた新しい分野ではあるが、その黎明期からエスニック地理学の代表的研究者として活躍してきた編者と、同じくエスニック地理学に関わる9名の著者により執筆されたのが本書である。

本書の重要なテーマに「エスニック・コンフリクト」がある。聞き慣れないという向きもあるだろうが、要するに、移民と彼らが移り住んだ先のホスト社会（受け入れる側の多数派の社会）との間で生じる様々な摩擦である。その摩擦は、内面的な葛藤のレベルで抑えられることもあれば、物理的衝突をとまなう紛争に至る場合もある。この

ようなエスニック・コンフリクトは、国境を超える移民が増加した現在、日本を含め世界各地で観察され、一部地域では深刻な問題となっている。

本書に集った合計10名の研究者は、世界各地のエスニック集団に関する数多くの業績をこれまでに積み上げてきた。彼ら／彼女らが、各地のエスニック集団とホスト社会との間で生じるエスニック・コンフリクトの地域的な特色を調査し、その要因・背景について考察することを目的としたのが本書である。

本書は12の章により構成される。Ⅲ章以降は分担執筆者による事例研究であるが、それに先立ちⅠ章「移民エスニック集団とホスト社会」（山下清海）では、編者自身によりエスニック集団の概念が定義され、エスニック・コンフリクトの類型化が試みられている。また本書で扱われる具体的事例について、「世界各地で増加している移民エスニック集団」および「日本国内のニューカマーの移民」と「ホスト社会」の間でみられるエスニック・コンフリクトであるとして、今後各章で展開される議論の範囲が示されている。本書を貫く二つのキーワードと議論の範囲が冒頭の章で整理されることにより、この章に続く日本や世界各地の様々な事例の議論に読者がスムーズに参加できるベースが提供されている。

Ⅰ章で議論の枠組みが提示されたのに続き、Ⅱ章「移民エスニック集団とホスト社会の分析キーワード」では、Ⅲ章以降の事例研究の研究視点や分析方法を理解するうえで役立つ九つのキーワードが紹介されている。キーワードごとに節が構成され、それぞれの節をⅢ章以降の分担執筆者が担当している。単なるキーワードの紹介のレベルではなく、エスニック集団とホスト社会の交渉とその結果生じるエスニック・コンフリクトについて理解するうえで重要な視点について、踏み込んだ解説が加えられている。本章で紹介される諸事象